



筑摩世界文學大系

15

セルバンテス

会 田 由 訳



ドン・キホーテ 前篇・後篇

筑 摩 書 房

筑摩世界文學大系 15

昭和四十七年六月十六日

初版第一刷発行

昭和四十八年七月三十日

初版第二刷発行

セルバンテス

訳者

会田由

発行者

井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―九一

電話東京二九二七六五一

振替口座東京四一二三

印刷

三見印刷

製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20615 (出版社) 4604

目次

才智あふるる郷士ドン・キ ホーテ・デ・ラ・マンチャ	会田由訳	5
前篇		5
後篇		325
ドン・キホーテについて	M・ロベール 円子千代訳	703
解説	会田由	717
年譜		729

セル
バン
テス

才智あふるる郷士ドン・キホー
テ・デ・ラ・マンチャ 前篇

ヒブラレオン侯爵、ベナルカーサルおよび
パニャーレス伯爵、プエブラ・デ・アルコセ
ールの子爵、カビリーヤ、クルエールおよびプ
ルギーリョス諸都邑の領主なる、
ペーハル公爵に献ず

芸術、なかでもみずからの高貴さによつて、
俗衆の供用と利得に屈することなき諸芸術を好
んで庇護し給う貴公子として、あらゆる種類の
書物に対して閣下の与え給う厚い歓待と榮譽を
信じて、ここに私は、『才智あふるる郷士ド
ン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』を、閣下の
いとも輝かしい名の下に公けにしようと思ひ
いたしました。これは、学識ある人々の家で
きあがつた諸作品がまとうのを常とする優雅、
博識というがごとき高貴な粉飾はいささかも
とってはおりませんが、己が無知の狭隘な境地
に満足せず、ともすれば他人の労作にはなほだ
峻烈不当な断案を下すを常とする、ある種の人
人の批判に惹なく、閣下のご庇護の下にたえ
るために、高貴なご身分に対して当然払うべき
畏敬の念を抱きつつ、これを閣下の庇護のうち

に氣持よくお受け入れくださるるに懇願いた
すものでございます。されば、賢明なる閣下は、
私の意のあるところを明察し給ひ、かくも輕少
なる奉仕の貧しさを蔑視し給うごときことなき
を確信いたす次第でございます。

ミゲール・デ・セルバンテス・サベードラ

序言

閑暇な読者よ、予がこの書物を、己が知能の
子として、想像しうるかぎり、およそ美しい、
高雅な、巧緻なものであれかしと願っているこ
とは、いまさらとりたてて誓わないでも、お信じ
くださるところであらう。とはいへ、自然の法
あらゆる物は己に似たものしか生まぬという、
この自然の法には、ついに予もまた逆らうこと
ができなかつたのである。されば、この乏しい、
一向に教養のない予の才知が、あたかもあらゆる
不便がはばをきかせ、あらゆるわびしい物音
の住み家たる牢獄のうちで生まれたもののよう
な、干からびて、瘦せ細り、とりとめもない、
しかも種々雑多な、いまだかつて誰一人思いつ
いたことのない思考にみちた息子にも譬すべき
物語以外に、いったい何を生むことができたろ
う？ 静謐、落ちついた境地、田園の楽しさ、
晴朗な天気、泉のせせらぎ、精神のやすらぎ、
こゝろのこころいかに不妊の詩の女神も、饒
に交え、この世を驚異と歓喜でみたすていの、
数々の分娩を世にもたらしめるのに大いにあず
かつて力のあるものである。どうかすると、父
親が醜いみじんも可愛気のない息子を持ちなが
ら、子供の愛に盲になつて、子供の欠点が見え
ないばかりか、あろうことか欠点を頭のよさと

も美点とも思いこんで、友達連にむかつて才氣か愛嬌のごとく得々として吹聴に及ぶこともまれではない。しかし予は、一見父親に見えても、じつは『ドン・キホーテ』の継父なのだから、一般の風潮に従うつもりもなければ、他の連中のやするように、愛する読者よ、予は両眼にほとんど涙さうかべて、この予が息子のように、あなたのオ氣づきになる数々の欠点を、許したり見逃したりしていただくなどお願いする所存は毛頭ない。なぜならあなたはこの子の縁者でもなければ友達でもない、あなたはご自分のからだの中にちゃんと自分の精神を持っておいでし、およそ非のうちどころのない確固たる自由意志を持っておいで、それにあなたはご自分の家の中にいらっしゃる、ここでは王が課税の主でいらっしゃるごとく、あなたは一切の主だ、のみならず『己が外套のうちでなら王者も害すべし』と世間で言い習わしている諺も存じはずだからである、いや、あなたはこういう一切のことから自由な立場においでだし、すべての思惑だの義理だのというものから掣肘を受けることもないのであってみれば、この物語について、心に浮かんだことは一切合財おっしゃれようというものだ、しかもけなしだからといって非難される恐れもなければ、褒めたからといって別に報いを受けることもないのである。ただひたすら予の念願とするところは、序文の飾りも、よく世間で著書の巻頭に並べたて、ありきたりの十四行詩、警句、頌詞などの無数

の羅列もなく、この物語をありのままに裸のまゝまであなたに差しあげたいことだった。なぜなら、なるほど予がこの物語を作るのに多少骨を折ったことは事実だが、あなたがこれからお読みになろうというこの序文よりけいと思つたものはないと、はっきり申し上げることができからである。予は幾度かこれを書くこととして筆を取ったが、何を書いていいかわからないで幾度も筆を置いた。一度そうやってぼんやりと、紙を前に延べ、筆を耳にはさみ、机に肘をつき、頬に手をあてて、何を書いたものかと思ひにふけていたところへ、ひょっこり快活な、しかもなかなか物分りのいい友達がはいってきたのであるが、その男は、予の考えこんだ様子を見て、その理由を訊ねた。そこで、予は別に隠し立てしないで、『ドン・キホーテ』の物語のために書かなければならない序文を考えているのだが、それがあまりつらいので、いっそのこと書くのを止めようか、それともあれほど高邁な騎士の数々の武勲を公けにするのを止めようかとまで思っているのだと話した。

「それというのも、わがはいが世間に忘れられて沈黙のうちに眠って以来過ぎたこんな長年月の後で、今頃になって積み重ねた齢を背中に負って、しかも、ちやうど灯心草か何ぞのようにひからびた、創意も乏しければ文体も貧弱な、思想も稀薄で、そのうえに博識も学説も欠如した、思ひまけにわがはいの見る他の書物のごとく、欄外に引用句もなければ巻末に注釈もない、架空な

物語などをかかえて、おめおめと出て来るところを見たら、世間で俗衆と呼んでいる年とたた立法者が何と云うだろう、このことがわがはいをいささかも当惑せしめななどと、いったいどうすれば君は考えるだろうか？ 何しろ他の書物とては、いずれも荒唐無稽な平俗本のくせに、アリストテレスやプラトンやその他凡百の哲学者の箴言だらけだから、おかげで読者諸君はすっかり感心して、つい著作者を学問のある、博識な、雄弁な人物だと思ひこむほどなんだからね。ところで、この連中が聖書を引用するときときたらどうだろう！ 誰しも聖トマスか教会の博士方だとか思わぬに相違ない、それというのも先生方は、この場合、ある行で無我夢中の恋の奴を描くかと思うと、別の行ではありがたいお説教をちよつぱり小出しにするという、じつに巧妙な節度を守るものだから、これを耳にしても読んでも、楽しくもあれば面白くもなくて、そんなものは何ひとつあるはずがないんだ、なぜならわがはいには欄外に引用するものもなければ、巻末に注釈すべきものもない、それどころか、みんながやるように、巻頭に、アリストテレスに始まってクセノフォン、それからゾイロスかゼウクセスに終わる、といったこのうち一方は酷評家だし、いま一方は画工なんだが、A・B・C順に並べようと思つたところ、だいいちこの本の中でどんな作家を適用していいかわからないんだからね。それにわがはい

の本は巻頭に掲げる十四行詩も、いや少なくとも作者が公爵、侯爵、伯爵、司教、貴婦人もしくはごく名の聞こえた詩人だという十四行詩はなしですまさざるをえない。もつともわがはいが二、三の世話好きの友達に頼みさえしたら、彼らが書いてくれることは知っているんだ、しかもわがスペインで高名を謳われている連中の作品もしょせん太刀うちできないような作品をだ。要するに、君」と、予はなおも言葉をつづけた。「わがはいはドン・キホーテ氏を、現在彼に欠けているこういうもので彼を飾ってくれるような人物を、いつの日か天がつかわし給うまで、ラ・マンチャの彼の書庫の中に埋もれたままにしておくことに決めただ。それというのも、わがはいの浅学菲才をもつては、とうてい欠を補うこともできないし、また一方、何もそういう連中のお世話にならないでも自分だけでも十分に言えるようなこと教えてくれる作者連中をわざわざ探しまわすには、どうもわがはい生まれつき無精で億劫がり屋なんだ。そこでごらんのとおりに考えこんで上の空でいたというわけだ。こいつはお聞きのとおり、わがはいが考えこむだけのことは十分にあるじゃないか」

これを聞くと、友達は軽くひとつ額を叩き、それから大声で笑い出して言った。

「こいつはどうも、君、今にして初めて、君を知ってこの方長いあいだずっとおちいっていた迷妄から目ざめたよ、わがはいは終始、君という人を、やることなすことに抜け目のない思慮

のある男だと思ひこんでいたんだからね。しかし、今こそ君がそれから隔たること雲泥の差だということがわかった。それにしても、これはどうでもない、造作なく補いのつく事柄に、君のように老練な、他のもつともつと困難なことでもさつさと片づけ、切り抜けつけている練達の士を、考えこませたり、意気沮喪させる力があるなんておかしいじゃないか？ いや、きつと君の知恵が不足だからじゃなく、無精で頭の働かせ方が足りないからだろ。わがはいの言うことが本当かどうか知りたいのかい？ そんならわがはいの言うことをよく聞き給え、そうすりゃ、いかにわがはいが、それこそまたたくうちに君の一切の難題を解決するか、あるいはまた、君の言うところでは遊行の騎士道の光明とも鑑とも言いつべき、君のすばらしいドン・キホーテの物語を世間に出すことすら放擲するほど、君を悩まし沮喪させるという、一切の足らないところを補うか、わかつてもらえようというものだ」

「さあ話し給えよ」と、予は友達の言葉を聞いて返事をした。「君がわがはいの懸念の空白をどうやってみたし、わがはいの混沌たる困惑にどうやって光を点ずるつもりか？」

これに対して友達が言った。

「君が巻頭に必要だという、それもお偉方やいじめめしい肩書の人々の作品がいいという、十四行詩だの、警句だの、頌歌について君の意を用いる第一の問題は、君が自分でそいつらをつく

るというちよとした努力さえ払えば、何でもなく解決できる、その後でそいつらに君の好きな名前をかぶせて、洗礼をほどくすんだよ、インドのフワン主教の作品だということにしようが、ないしはトラビソンドの皇帝の作品だということにしようがかまわないさ、何でもわがはいの聞いた噂だと、この二人は大した詩人だったそうじゃないか。なあに、よしんばそれが違っていて、おまけに学問を鼻にかける先生たちやへつぽこ学士連がそのことで君に食ってかかったり、がやがや言いたてたりしたところで、それこそ鼻もひっかけるにやあたらないさ。だって君、いくら先生たちが君のインチキを詮索したところで、まさかそいつを書いた君の手をたち切るわけにはいかないんだからね」

「君の物語に挿入するのに、格言や言葉を引用するいろんな著者や作家を欄外に挙げる件については、君が空で覚えているとか、あるいは探したところで大して手間のかからないような格言なりラテン語の文句なりがびびりたり当てはまるように工夫するに限る、たとえば自由や束縛について述べる場合には、

Non bene pro toto libertas venditur auro

(自由ハ黄金ノ山トモ換ウベカラズ)

というのを引用するようなものだ。それからさつそく、欄外にホラティウスだか誰だかそれを言った人物を挙げるんだ。また死神の力というものを主題にするとしたら、

Pallida mors aequo pulsat pede pauper-

rum tabernas. Regunne turres

(蒼白ナル死ノ神ハ等シキ足ヲモテ、貧者ノ小屋モ王侯ノ宮居ヲモ訪ズルナレ)

というやつを使う。

もしまた、友情とか、敵に対して抱けよと神の命じ給う愛に関する場合なら、それこそ遅疑することもなく聖書につくことだ、こいつはほんのわずかばかり調べる気さえあればできることだし、少なくとも神さまご自身の言葉で言うことができ、Ego autem dico vobis: diligite inimicos vestros (然モ我爾曹ニ告ゲン爾曹ノ敵ヲ愛メヨ)と。もし邪惡な考えについて書くようなときなら、福音書の、De corde exeunt cogitationes malae (心ヨリ出ル所ノ惡念)を利用し給え。また、友人の頼みがたいことを扱うつもりなら、ちゃんとカトーがいて、彼の連句を覚えてくれる。

Donec eris felix, multos numerabis amicis,

Tempora si fuerint nubila, solus eris.

(汝ノ幸ナルアイダハ友多カラン、

サレドモシ天候曇ラバ汝ハ孤独ナラン)のみならず、こういうラテン語の切れつぱし

やその他これに類した片言隻句のおかげで、世人は君を古典学者と思ひこむに違ひない、しかも古典学者であることは、当世じゃ少なからざる名譽だし得のゆくことなんだからね。

次に本のうしろに注釈をつけるという一件は、ざっとこんな工合にすればわけなくできる。も

し君が本の中で何か巨人の名を挙げるとしたら、その巨人は巨人ゴリアテということにし給え、これなら全然骨の折れることはないはずだし、もうそれだけで大した注釈ができるはずだ、というのには次のようにやれるからなんだ。すなわち『巨人ゴリアテ若シクハゴリアト。ペリシテ人ニシテ、羊飼イダビデコレヲ石ヲ以テ強く打ち、テレビントノ谷ニ殛セリ、列王紀略ニ記サルルトコロニヨル』ただし書いてある章は君が探すんだ。

その次に、君が人文学や宇宙学に蘊奥を極めた男だということを示すには、君の物語の中にタホ河の名を挙げるようにするんだ、そうすりゃたちどころに今ひとつすばらしい注釈をほどこすことになる、こう書くんだ、『タホ河ハイスパニヤ諸邦ノサル国王ニヨリテ銘記サル。源ヲ某ノ地ニ発シ大洋ニ注グ、ソノ間名高キリスボア市ノ城壁ヲ洗フ。而シテ黄金ノ砂ヲ有スト称セラル然々云々』もし君が盜賊のことを述べるつもりなら、わがはいがカークスの話をして聞かせよう、こいつはわがはい宙で覚えていたのだから。もしまた自堕落な女についてだったら、あやあんともンドニエードの大主教*がおいでだ、あの人がラミアードのライダだのフローラを貸してくれるだろうし、この女連の注釈なら君だって大いに信用を博すること必定だ。つれない女連だったらオヴィディウスがメデアを貸すだろうし、魔女や女の魔法使だったら、ホメロスにカリュプソ*があり、ウェルギリウスにキ

ルケ*がある。もし剛胆な武将なら、あのユウリウス・カエサル*が自作の『ガリア戦記』の中の自分自身を貸してくれるだろうし、プルターコスならアレキサンドロスを千人くらい貸してくれるさ。もしまた恋愛について書くつもりなら、せいぜい二オンスばかりトスカナ語を知ってさえいたら、レオネ・エブレオ*にぶつかれよう、これならいくらでも教えてくれる。しかし外国にもとめるのがいやだと思ふなら、わが朝ではフォンセーカの『神の愛について』がある、この本には君にしる、どんな奇知縦横の男にしる、この問題について知りたいと思ふような一切がまとまっている。要するに、君はこういう人名を挙げたり、今わがはいの話した、ああいったいろんな物語を、君の物語の中で触れるようにつとめさえすりゃいいんだ、注釈や説明をつけ加える役目は万事わがはいに一任し給え。わがはい誓って欄外をうらずめ、巻末の四ページをきれいに使っておみせしよう。

さて今度は、他の多くの本にあって、君の本にはないという、著作者の名前を掲げる件に移ることにしよう。この対策はいったって簡単だ、というのは君がさっき言ったとおりAからZまで、そいつを残らずなべている本を、なんでもいいから、一冊探しさえすればいいんだからね。もししたらこのABC順をそっくりそのまんまわれわれの本に持ってくるんだよ、なあに、よしんばこの誤魔化しはつきりと見えすいたところで、なにしろ君にはこういう著作者を利

用する必要はまあほとんどないのだから、別に差支えはないはずだ。いや、どうかすると、君のこのごく単純な何の奇もない物語の中で、君がこういう著者連を大いに駆使したなぞと思ひこむような、頭の単純な男がいるかもしれないんだ。それに、こういう龐大な著者名目録は、他に役に立つことはないかもしれないが、少なくとも君の本に思ひがけない權威をつけることにならないとも限らない。それにさ、別にそんなことをしてもなんの得にもならないんだから、君が事実そういう著者に追従したかしないかなどということ、を、わざわざ詮索しようという物好きもいなかろうじゃないか。いや、それどころか、わがはいが感違ひをしないとしたら、この君の本には、君が必要だといったああいふ著者名目録なぞこれっぽっちも必要じゃないね、なぜと云つて、この本は始めから終りまで騎士道の書物に対する攻撃だから、なにしろそんなものはアリストテレスの夢にも思ひ起こさなかつたことだし、聖、バシリウスも何ひとつ言つていないし、キケロだつて知らなかつたんだ、騎士道の書物の荒唐無稽なためな世界には、真実の敵正さも、占星の数々の観測も縁なき衆生だ、幾何学の尺度も役に立たなければ、修辭学を用いる論難も一向に力がない。それに俗事と神さまのことを織り混せて、こいつはいわばキリスト教徒の頭脳に着せては禁物の交織だが、そうやってひとさまに説教する必要は何ひとつない。ただ要は書いてゆく作品の中で、物真似

の才能をせいぜい發揮することだ、物真似がうまければうまいだけ、出来上がる作品が優れたものになる。それになにしろ君のこの著作は、騎士道に関する書物が、世間や俗衆の間に持っている權威と勢力を打ち倒す以外に目的はないのだから、何もはつきまわつて哲學者連から箴言を、聖書から助言を、詩人連から寓話を、修辭學者諸公から文章を、聖者方から奇跡を恵んでもらう必要は全然ない。そんなことよりも意味のはつきりした、おだやかな、しかもその場その場にしっくり当てはまる言葉を用いて、君の文章がいかにも平明になり、一句一句が調べ高く輕妙をきわめるように心がけて、君の力のおよぶかぎりなるべく君の意のあるところを表明し、混乱させたり曖昧にしたりすることなく、君の思うところを伝えることだ。それと同時に、君の物語を読むと、沈鬱な男もつい笑ひ出し、快活な男はいっそう愉快になる、愚者も退屈せず、才子も思ひつきの妙に目をみはれば、生真面目な男の鬢髻も買わず、賢者もまた賞讃を惜しまないというふうにつとめることだよ。本当に、大勢の連中に見捨てられ、同時にそれよりも多数の連中に持てはやされているああいふ騎士道に関する群書の、根太のゆるんだ襟を覆えすということに、君の狙ひをあくまでつけることだね、これが成功してみ給え、けつしてこりゃ馬鹿にならぬ功績だろうよ」

予は黙々としてわが友の言うことに耳を傾けていたのであるが、彼の説があまりにあざやか

な印象を刻みつけたので、なんら異論を立てることもなく、それらの説の正しさを認めて、それによつてこの序文を作ろうと思つたのである。心やさしい読者よ、そなたは、この序文の中で、わが友の思慮の深さ、どうにもならないと困つてゐる時に、こういう忠告者を見つけた予の幸運、さては音に聞こえたドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャの物語を、ありのままに、なんの面倒もなく読むことができるというそなたのたのしさを認めことになるに違ひないが、このドン・キホーテについては、何年もの昔から今日までモンテ・エルの平原に現われたもつとも純情な恋人で、もつとも勇敢な騎士であつたといふことが、あの地方のすべての住民のひとしく口にする噂である。予は、これほどにも氣高く、誠実な騎士を、そなたに紹介するというこの奉仕を、いささかも誇張するつもりはない。しかし、彼の従士、音に聞くサンチョ・パンサをお知りになるということでは、是非とも予に感謝していただきたいものだ、予の考えでは、この男の中に、くだらない騎士物語の群書の中に散らばつてゐる従士のあらゆる魅力をかいつまんで、読者に提供したつもりである。では、これで、神がそなたに健康を与え給はんことを、そして、予のこともお忘れなさらないようにお祈りする。さらば。

ドン・キホーテ・デ・ラ・
マンチャの書物に

顔を知られぬウルガンダ*

なんじ書物よ、思慮ぶかく
よき人々のもとにいたらば
愚か人らもなれを目ざして
つたなきものはよも言わじ。

されどもし思いまどいて
愚かなる手にもわたらば
よし彼ら指をくわえて
風流人士の顔をなすとも
たちまちに君はさとらん
あやまてる君がねらいを。

大なる樹によるときは
よきかげを身にぞうくると
経験の教うるごとく

汝を守る幸い星が
ペーハルに大樹を見いで
世々公子の果実をむすび、
今ぞ花さく公爵こそは
近き世の歴山大帝

いざ身をよせよ、そのかげに
好運は勇者が味方。

よしなき書物あまた読み
心狂えるマンチャびと
そがなすいくたの冒険を
君よつづさに語れかし
上臈、物の具、騎士などに
うつつをぬかしていにしえの
オルランドにあやかりて
心にやどす恋心
手ごめになせるたおやめは
トボーソ村なるドウルシネア*。

象形文字の紋どころ
記し給うなよ楯のうえ
かるたあそびは絵札のみ
勝負をきむるものならず。
ささげ言葉をつつしまば、

『見よ、ドン・アルバロ・デ・ルーナ殿
さてはカルタゴのアンニバル
スペインへ来しフランソワ

誰か不運をかこちたる』
などと皮肉は申すまじ。

黒んぼ小僧、ラテン語フワンとことかわり
ラテンの言葉に通ぜよと
神も命じ給わねば
ラテン語かたる要もなし。
鋭鋒はこることもなく

哲学きどりの論議はやめよ
一語も解せぬ痴れ者が
口をまげつつ耳もとで
ささやくことを聞き給え
『われに花など用はなし！』

あかの他人のなすことを
描くも知るもさけよかし
己にかかりなきことに
たち入らぬこそ賢けれ
人を揶揄する仕返し
返し言葉を覚悟せよ。
己が名前を高めんと
君はつとめよひたすらに。
つまらぬ書物を出したなら
絶えぬ非難を覚悟せよ。

ガラスの屋根の家において
隣の屋根をうたんとて
石をひろいて手にもつは
知恵なきわざと知れよかし。
思慮ある人が作品を
ものする筆のためらいを
あえてとがむることなかれ。
小娘どものたのしみに
著作を上木なす者は
狂愚のために書くこと知れ。

アマデイス・デ・ガウラ*より
ドン・キホーテ・デ・ラ・マン
チャに

(ソネット)

君をさかりてつれなさを
ポーブレ岩*のいただきに
喜びかけて苦しのぶ
かなしき身すぎまねぶ君。

両のまなこにはふりおつ
からき涙に渴をいし
銀、錫、銅もなきままに
土をかけてもなせし君。

輝くアポロが天空に
駒をすすむそのひまに
とこしなえる生うけよ。

君は武名をかうべく
君が祖国は他にすぐれ
君が作者はたぐいなし。

ドン・ベリヤニス・デ・グレーシ
*よりドン・キホーテ・デ・ラ・マ
ンチャに
(ソネット)

世の遍歴の騎士にまさりて

破れり、斬れり、言えり、行いき
手練をはこり剛勇無双
悪をこらしめ、非理をただせり

いさおはとわにわが名をかかけ
礼を重んじ情を知れり
巨人もわれには侏儒に劣り
名譽に閑し用心ぶかく

運の女神を足下に伏せしめ
頭はげたる機会の神の
前髪とらえて屈伏せしめ

好運つねに月にかかれど
君がいさおを羨むものぞ
ああ偉なるかなドン・キホーテよ！

オリアナ姫*よりドウルシネア・
デル・トボーンソに
(ソネット)

あわれうるわしのドウルシネア
ミラフローレス*をトボーンソとし
わが住む都ロンドンを君住む村と取りかえて
こよなき幸を得るは誰ぞ！

君が思いとよそおいを
心にいだき身にまとい
君ゆえ幸を得し騎士の

はげしき戦い見しは誰ぞ！

心やさしきキホーテに
君なし給えるそのままに
誰か清らに身をたもちアマデイス殿を逃れ
えん！

さればうらやむこともなく、うらやまるべき
われならむ

悲しきときもたのしみて
悔なきよろこび得てあらむ！

アマデイス・デ・ガウラが従士、
ガンダリン*よりドン・キホーテの従
士、サンチョ・パンサに
(ソネット)

これさ、名物男よ、たまさかに
従士の役をつとめては、
やさしくまめにしおわせて
禍いひとつあわなんだ。

武者修行に鍛と鎌
今ではこれも矛盾せぬ
月をふまえる傲慢をとがめだてする
従士めく、わが無作法も流行だ。

うらやましいのは君が驢馬、君が人氣と
振分けの、おぬしが用意をものがたる

しこたまつめただんぶくろ

ふたたび言うが、おおサンチヨ、申し分ない
よい男、

おぬし一人におれたちのスペイン国のオヴィ
デウス

ちよいとふざけておじぎなさるぞ。

ごたまぜ詩人のおどけ者からサン
チヨ・パンサとロシナンテに

サンチヨ・パンサに

これはこれマンチャの住人ドン・キホーテが、
従士をつとむるサンチヨ・パンサ。

ちよいと利口に世わたりしようといつも尻には帆かけてござる

逃げ足早のビリャデイエゴどんの
十八番の奥の手は

三十六計逃げるにしかず。

浮世の色気を小出しにしたらば、

これは思うに見事な本の

セレスティーナが気づいたとおりに。

ロシナンテに

これは大バビカがとおつ孫、
音に聞こえたロシナンテ
瘦せさらばえた咎により

ドン・キホーテを主とたのむ
ひづめのかぎり駆けたおかげで
小麦だけは事欠き申さぬ
めくらの酒をこっそり飲むとき
麦しべ与えたラサリーヨに
これぞ習った手段でござる。

狂えるオルランドよりドン・キホー
テ・デ・ラ・マンチャに
(ソネット)

君は公子にあらずとも君に抗せし者はなし
あまた公子のある中の公子となるべき人なれ
ば。

君あるところいずこにも、君に抗する者あら
じ、

戦さへのぞみ常に勝ち、ひけをとりたること
はなし。

予はオルランド、キホーテよ、恋をいだきて
うつつなく

アンジェリカを求めんと、海のはてさえさす
らいぬ、

名譽の神の祭壇にささげしものは『忘却』が
手をふれざりしかの勇氣。

よしわれに似て君もまた、常軌を逸し給えど
も
君がはまれはひたすらに君がいさおと君が名

に
もとつくゆえにわれとても、いかでか君にな
らぶべき

幸なき恋をなすゆえにわれと君とをともがら
と、

呼ぶにあらずや君にして、おごるモーロやス
キティヤを

平らげ給うあかつきは、なおさらわれのとも
ならん

日輪の騎士よりドン・キホーテ・デ・
ラ・マンチャに
(ソネット)

イスパニヤの日輪よ、たぐいまれなる宮人よ、
君がつるぎの鋭さに及ばざりけりわがつるぎ。
日のいでて日の沈むさかいにかつて輝きし
わがわざいかで及ぶべき、君がかがやくほま
れには、

帝位もわれはなげうちぬ、わがあかつきの女
神なる

クラリディヤナがうるわしき、ほこりに輝く
かんばせを
一目見んとてあかねさす東方がわれにささげ
たる

国土もむなしくうちすてぬ。

またなき宝とかの君を、われはめでしがかの君の

不幸にわれのつきそわでありしわが腕恐れてか、

地獄もいかりしずめけり。

さればおんみよ名も高き、かがやくゴードのキホーテよ

ドウルシネアの君ゆえに、そなたはとわの生をうけ、

おんみのゆえにかの君も、ほまれとみさおと知恵をうく。

ソリスダンよりドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャに
(ソネット)

キホーテ殿よキじゆるしと馬鹿なやつらに言われてもいやしい下司なわざをなす人とはよもや言われまい。

おみの手柄がこよなき判者、非道をこらす旅にいで傲岸不遜の痴れ者に
なぐられたのもいくそたび

よしや美形のドウルシネアがおんみにつれなくあたろうと

おんみが口説を聞くまいと

サンチョ・パンサがとりもちの下手ゆえ起った不運とあきらめやつめはまぬけ、女はじゃけん、そなたはふられ男と思え。

バビエーカとロシナンテの問答
(ソネット)

バ 何でおぬしは、そんなに瘦せているんだ、ロシナンテ？

ロ 何にも食わずに働くからさ。

パ そんなら、麦や粟はどうしたね？

ロ おれの主人は、ひとくちだつてくれやしないよ。

パ はほう、おぬしは育ちが悪いぞ、

主人のわる口をいう舌は、驢馬にそっくり。誰しも生まれるから死ぬまで驢馬そっくりさ。

その証拠には、恋しているやつを見るがよい。

パ 恋をするのは阿房かな？

ロ 大して利口とはいえないね。

パ ひどく悟ったもんだね。

ロ 食うものを食わんからさ。

パ 従士をうらむさ。

ロ それだけじゃ足ら

ないよ。

なにしろ主人も従士も、いやさ番頭も、ロシナンテにおとらぬ駄馬だとしたら、俺のつらさをこぼそうにもこぼしきれなからうじゃないか？

第一篇

第一章

名にし負う郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マン
チャの為人および日常について。

名は思い出したいくないが、ラ・マンチャのさ
る村に、さほど前のことでもない、槍かけに槍
古びた騎、瘦せ馬に、足早の獵犬をそろえた、
型のごとき一人の郷士が住んでいた。昼は羊肉
よりも牛肉を余分につかつた煮込み、たいがい
の晩は昼の残り肉に玉ねぎを刻みこんだからし
あえ、土曜日には塩豚の卵あえ、金曜日には扁
豆、日曜日になると小鳩の一皿ぐらいは添えて、
これで収入の四分の三が費えた。そののこりは、
厚羅紗の服、祭日用のびろうどのズボン、同じ
布の靴覆いに使い、ふだんの日は黒っぽいベリ
ヨリ織で体面をととのえた。家には四十歳を過
ぎた家政婦と、まだ二十歳にならぬ姪と、それ
に瘦せ馬に鞍もつければ、剪定用の鉋もふるう
畑仕事や市場への買物に行く若者がいた。われ
らの郷士の齡はまさに五十歳になんなんとして
いた。顔もからだも瘦せひからびてはいても、
骨組みのがつしりした男で、恐ろしく早起きの
大の狩好きだった、何でも通称をキハーダもし

くはケサーダと呼んだという者もいるが、この
点に関しては、それについて書いている著者の
あいだで多少の異論がある、もつとも信憑する
に足る臆説によると、ケハーナと呼んだともい
う。しかし、これはわれわれの物語にはさして
重要ではない。彼に関する物語の中で、ほんの
少しでも真実からそれさえしなければ十分だか
らである。

ところでご存じねがいたいことは、上に述べ
たこの郷士が、いつも暇さえあれば（もつとも
一年のうちの大部分が暇な時間であつたが）、も
たいへんな熱中ふりでむさぼるごとく騎士道物
語を読みふけたあまり、狩獵の楽しみも、は
ては畑仕事のさしずさえことごとく忘れ去つて
しまった。しまいにその道の好奇心と氣違い
沙汰がこうじて、読みたい騎士道物語を買つた
めに幾アネーガという畑地を売り払つてしまつ
た。こうやって、手に入るかぎりのそういう書
物をことごとく己が家に持ち込んだのであり
るが、あらゆるこの種の本の中で、あの名高いフ
エリシャーノ・デ・シルバの作つたものほど彼
の嗜好に投じた作品は一つもなかった。なぜな
らその文章の明快な点と、あの独特のこんがら
かつた叙述が、彼にはまるで珠玉とも思われた
からであつて、中でもどこを開いても『わがこ
とわりに報い給う、ことわりなきことわりにわ
がことわりの力も絶えて、君が美しさをなげき
かこつてもまたことわりなり』などと書いてある
ああいう恋の口説や決闘状を読むに及んでい

そうその感を深くしたからである。それにまた、
『星辰をもて君が神性をいとも神々しく力づけ、
君をしてその高貴にふさわしきふさわしきに、
正にふさわしき人ともなし給ういと高きみ空
……』などというところを読んだ時にはなおさ
らであつた。

こういうたいへんな叙述のおかげで、哀れに
もこの騎士は正氣を失つて、これを理解し、そ
の意味を底の底までつきつめようと夜の眼も寝
ずにつとめたのであるが、こればかりはよしん
ばアリストテレスがそのためばかりによみがえ
つてきたところで、しよせん意味を引き出すこ
とも理解することもできなかったに違いない。
彼はドン・ベリヤニスに人に与えたりみずか
ら身に受けた数々の手傷にはどうしても承服で
きなかつた。それというのも彼の治療をした外
科医連がいくら偉い先生ぞろいだったにしろ、
しよせん彼の顔も全身もところどころに瘡蓋や
疵痕だらけだったろうと思われたからである。
しかし、それにしてもこの作者があつたままだ完結
しそつもない冒険を未来に約束して物語を結ん
でいる点を賞讃していた、そこで彼は幾度か筆
をとつて、あの本に約束してあるように文字ど
おり物語の結末をつけようという氣持が起つた。
したがつてもしもそれより膨大な、しかも絶え
間なく訪れる別個の考えへの邪魔をしさえしな
かつたら、彼とてもかならず実行したに違いな
いし、それどころか見事にやつてのけたことは
火をみるより明らかである。